

2013年3月10日・「サンデーあげそげ」では

詩人中村真生子の新詩集発刊

米子市在住の詩人中村真生子（まおこ＝本名富士子）さんが、五冊目になる新しい詩集『なんでもない午後に』を出した。詩人がここ三年間に毎日一篇ずつ作り、「今、ここで」（サブタイトルは「自分探詩^{じぶんさがし}」）というインターネットのブログに発表してきた、千篇を越える詩の中から、一〇一篇を選びすぐって一冊にしたものである。

一読、筆者は感動のメールを著者に送った。

「日常のやさしい言葉が、あなたのペンにかかったら、どうしてこれほど光輝を放つのだろう。…時にその詩は読んでいる私に鋭い切っ先を向けてくれる。

その時自分は、迂闊にも忘れていたことを、悔恨と共に思い出す。…」

三年間毎日一篇…言うはたやすいが、至難のワザでもある。なぜそれが可能だったのか、謎解きの楽しみも含んでいる。

詩の出版社としては大手・最高の「コールサック社」の手で完成、代表の鈴木比佐雄（ひさお）氏自身が編集を担当、詩集に挟み込む形で長文・丁寧な「栞解説文」を付けてくれている。

時に価値の顛倒がある

苦悩してひねり出したような、そんな詩ではない。子供の時から詩を書いている中村さんの指先からするすると紡ぎ出された平易な言葉…読むうちにどこかで化けることを、一瞬楽しみながら読む…そして、あ！やっぱり！ストンと胸に落ちる。

鈴木比佐雄氏の「今」「ここ」にあることを、そのまま詩作する詩人だという評語に唸った。

〈今、ここで〉

なんだか虚しくなった時／心はどこかに出かけてる／／そんな時は口ずさむ／「今、ここで」と口ずさむ／すると、心が還ってきて／少し気持ちが楽になる／／なんだか苦しくなった時／心がぐにやりと歪んでる／／そんな時は口ずさむ／「今、ここで」と口ずさむ／すると、心が落ち着いて／少し気持ちが楽になる／／今、ここで／「今、ここで」と口ずさむ

詩人が発明したりセットの万能呪文である。

〈序詞 あるがままに〉

山茶花^{さざんか}の／／散る時を知る／／紅の道

序詞はこれだけの、俳句と言ってもいい詩だが、天然自然のままに生生流転に身を任せて、納得している。それも咲き切ったという自信があるからだろう。かくありたい。

深いことがこころよい

空も雲も雨も花々も野菜も…周りのすべての事象がこの詩人にとっては自由自在な素材であり、親友だ。

中村さんは「さんいんキラリ」の記者も務める。今井書店本の学校で三月一杯開催の「さんいんキラリ展」もしており、詩集はそちらにも置いてある。

コールサックは石炭袋の意味の他、暗黒星雲の名前でもある。詩人は見えるものを歌っても、言葉の陰に暗黒星雲を探る天文学者のように、見えない暗喩をひそめるのだ。詩集は本の学校などで1470円。手に取って、二四〇頁二七〇グラムの詩集に詰まった心の重みを確かめてほしい。（河中信孝）

と紹介されています。